

『英語能ハムレット』に於ける能形式演技の調和を考える
A Consideration of How to Incorporate the Noh Style
Performance into the Noh Version of *Hamlet* in English

杉澤 陽子

SUGISAWA Haruko

This paper considers how to bring into harmony Shakespeare's *Hamlet* and classical Noh when the Noh version of *Hamlet* in English is performed. In Japan classical Noh has been stylized over a period of more than 600 years. By incorporating the meditative scene encapsulated by the lines "To be or not to be ; that is the question / Whether 'tis nobler", Shakespeare's *Hamlet* is fused into the world of Noh where life and death are immaterial.

1 はじめに

この小論では『英語能ハムレット』の演出において、シェイクスピアの『ハムレット』と古典能との融合と調和について考察してみる。

異なる文化圏に生まれた二つの文化を理解し、あるものは切り捨て、あるものは取り入れて形作ることを文化の融合と考え、更に進化を展望しながら平成16年5月堺能楽堂に於ける『英語能ハムレット』の公演について分析する。

2 音楽劇としての調和と融合について

音楽は小鼓と尺八のみであった。まず、楽屋から尺八と小鼓の単調な音が聞こえてくる。これがお調べである。

幕うちのお調べが始まる。鏡の間ではシテは既に面をつけ心を静めて待機し、全て

の準備が整ったところで、お調べは行われる。これは決して道具の調整ではない。楽屋、すなわち能を行う人々と客席、見る人々との交流のきっかけとなる行為だ。¹

この時から、能が始まる趣きで、演者だけでなく見所の観客も心を静める。橋掛かりと鏡の間を隔てる幕が半分開き（片幕という開き方）尺八と小鼓の演奏者が登場する。これは正式な能の囃し方の登場と同じで、橋掛かりを歩み舞台に入る。同時に切り戸口から地謡が入場し、所定の位置に座付く。

600年を経て現在の形となった能舞台の枠組みの中から古典能本来の大鼓、太鼓、笛を省きあえて小鼓と尺八の演奏に限ったことで、『英語能ハムレット』の実験的試みが読み取れる。

尺八の演奏は、現代の古典能ではまったく採用されていないが、世阿弥の活躍した室町時代には、実際に尺八演奏による能が行われていたことが窺われる。世阿弥は同時代の田楽の役者だった増阿弥について、「尺八の能」があって、舞台上で尺八を使用したこと、その音色が出色で無双の上手であったと伝えられている。『世子六十以後申楽談義』に次のような記述がある。

「増阿が立会は、余のにも変わりたる」など申者有。尺八の能に、尺八一手吹き鳴らいて、かくかくと謡い、様もなくさと入、冷えに冷えたり。²

平成15年秋、堺能楽堂で上演された『英語能ハムレット』では小鼓を使わず、尺八のみの演奏であった。それによって、禅的瞑想の場面は透明感が増すことになる。

3 ドラマとしての演出法の融合と調和について

舞台上に囃子方、地謡が座着くと、後見がオフィーリアの亡骸を表す小袖を持ち、幕より出て橋掛かりを通り、舞台正面に静かに横たえる。オフィーリアを登場させず、小袖にて表わす演出は古典能『葵上』で用いられる手法である。能『葵上』では能の小道具として「病臥の葵上に擬した出し小袖の襟を脇正面へ向けて、舞台正面先へ展る。」³と能の型付けには記されている。『英語能ハムレット』に於いて一曲の構成上巧みに取り入れた演出法である。そこがたちまちに「墓掘り」の場面になりうるのである。

シェイクスピアの『ハムレット』では墓掘りからヨリックの髑髏を渡され、ハムレットは

Alas, poor Yorick! I knew him, Horatio: a fellow of in
finite jest, of most excellent fancy:
Where be your gibes now? your gambols? your songs?
your flashes of merriment, that were wont to set the table on a roar? ⁴

「どんなに厚化粧しても、行き着く果ては、これこの通りとな」⁵ と、才気煥発な人間でも、いくら化粧をして美しく装った人間でも、このようにいやなにおいを放つ髑髏に成り果ててしまうのだと髑髏に話しかける。ここでハムレットは復讐、つまり死へ向けて踏み出すことになるのだ。上田教授作『英語能ハムレット』はこの場面を廃し、「ハムレットは、小袖の前で、座禅の態。尺八の音。瞑想に入る。」⁶ という演出で現世の無常を表現する。『能・狂言研究 歴史と特色』に

世阿弥の作品は禅が取り入れられている。世阿弥はその禅の境地において、義持時代中期に於いては前期以上の深まりを見せ、晩年に到るほど、その著作に禅的色彩を強めていく。⁷

と記述されている。世阿弥が禅の手法を能の演出に取り入れたことで彼の作品はその表現に深まりをみせ「冷え」と言う境地に達することになる。「冷え」と言う表現は、世阿弥の伝書『世阿弥六十以後申学談義』に記されているが、注釈によると「味わいの深い冴えた芸の形容」である。『英語能ハムレット』はこの場面に瞑想を取り入れることで、復讐劇を能の世界観に融合させたのである。生死を超越した心境に達するハムレットの深い瞑想の場面は、オフィーリアの亡骸を表す出し小袖と尺八の演奏が調和して、悟りを芸術として高めていく。

4 古典能の詞章の採用について

「英語能」であるから、謡われる詞章もセリフも英語である。しかし一行「思えば仮の

宿」とシテが日本語で謡う部分がある。金春禅竹作といわれる『江口』のキリの部分から採用されている。

思えば仮の宿。思えば仮の宿に。心とむなと人をだに。諫めしわれなり。
 これまでなりや帰るとて。すなわち普賢菩薩と現れ舟は白象となりつつ。⁸

と謡われている。西行法師がある時、日が暮れて一夜の宿を求めて断られたので「仮の宿りを惜しむ君かな」と口ずさむと、江口という遊女が「仮の宿りに心とむなと思うばかりぞ」と答えたと言う挿話をもとに作られた曲である。一夜の宿りを惜しむ惜しまぬの問題ではなく、この世とても仮の宿であるからそれに執着するなという意味である。

『英語能ハムレット』では中入り後、間狂言の形でホレーショによってハムレットの生涯を語り終えると、ハムレットは瞑想によって悟りを得、生か死か、それはもはや問題ではないという境地に達する。そこに能楽『江口』の謡が挿入される。

思えば仮の宿

This world is not for aye;

All that lives must die,

Passing through nature to eternity.

『英語能ハムレット』に於いてハムレットは “To be or not to be ; is *not* the question” の心境に達する。ここにシェイクスピアの『ハムレット』は古典能の幽玄の極である「冷え」に達するのである。

5 結び

能楽は奈良時代中国から渡来した散楽から猿楽となり、社寺の門前で行われていた芸能である。鎌倉時代には民間から起こった田楽やさまざまな歌舞音曲などと影響しあって発達した。室町時代、観阿弥が現れ、物まね中心の芸能に舞歌を取り入れ、両者を融合させた能楽へと進化させ、それを継承した息子世阿弥は時の將軍足利義満の庇護を受けながら、「幽玄」「禪的なもの」を導入し、より芸術性の高い能楽を完成させる。江戸時代に入ると

徳川幕府の保護を受け、武家の式楽として形式化し、伝統保持に終始し、時代とともに生きる演劇の創造性が弱まる。その後江戸幕府の崩壊とともに保護者を失い、一時能楽の衰退期となるが、危機感を持った梅若実、桜間伴馬、宝生九郎など名人が現れ、能楽復興に力を尽くし、明治、大正、昭和と能楽の復興期を迎え、現在は次々と新作能、特に外国文学を翻案しての新作能が発表されるようになった。

シェイクスピアの作品は、日本語による創作能として『オセロー』『ハムレット』も発表されているが、この『英語能ハムレット』はシェイクスピア作『ハムレット』をより忠実に能楽化を試み、セリフ劇である原作『ハムレット』を、幽玄、禅思想を取り入れた音楽劇である能楽の形式に融合させたものである。

能楽は600年以上の年月を経て、舞・音楽・舞台・演出をその時代の人々に求められる価値観に沿って変遷し、その舞台建築、演奏者の構成、装束の美意識、囃子の音楽性、いづれも年月をかけて無駄を省き洗練されて、今日の能形式として完成されたものである。異なる価値観によって培われてきた異文化を取り込み、融合させるには、両者への深い理解が求められると同時に、この調和の取れた能舞台の空間が持つ力強さに負けない演技力は不可欠である。『英語能ハムレット』の出演者全員が、この異文化理解とゆるぎない技術を舞台上で実現することで、世界に向けて生きる力を与える演劇として完成するのではないかと思う。

【 註 】

- 1 津村禮次郎著 『能がわかる 100 のキーワード』 小学館、2001年 p63
- 2 表章 加藤周一校注 『世阿弥 禅竹』 岩波書店、1974年 p284
- 3 観世佐近訂正著作 『葵上』 檜書店、1961年 2枚目裏
- 4 宗方邦義編注 『シェイクスピア名場面集』 北星堂、1979年、5幕1場 202-211行
- 5 シェイクスピア作 野島秀勝訳 『ハムレット』 岩波文庫、2002年 p280
- 6 上田邦義作 *HAMLET IN NOH STYLE* 台本 p7
- 7 宗方邦義著 『能・狂言研究 歴史と特色』 私家版、p6
- 8 観世左近著 『江口』 檜書店、1961年、11枚目終

【参考文献】

- 上田邦義著 *HAMLET IN NOH STYLE* 研究社出版、1991年
- 表章 加藤周一校注 『世阿弥 禅竹』 岩波書店、1974年
- 観世左近著 『葵上』 檜書店、1961年
- 観世左近著 『江口』 檜書店、1961年
- 小林保治 森田拾史郎編 『能・狂言図典』 小学館、1999年
- シェイクスピア作 野島秀勝訳 『ハムレット』 岩波書店、2002年
- シェイクスピア作 福田恒存訳 『ハムレット』 (新潮カセットブック) 新潮社、1993年
- 津村禮次郎著 『能がわかる100のキーワード』 小学館、2002年
- 西脇順三郎著 『芭蕉・シェイクスピア・エリオット』 恒文社、1989年
- 宗方邦義編註 『シェイクスピア名場面集』 北星堂、1979年
- 宗方邦義著 『能・狂言研究 - 歴史と特色』 私家版